

講堂

この優雅な講堂は、ずっと唐招提寺の境内に花を添えていたわけではありません。奈良時代（710～794）に平城京（現在の奈良市）にあった平城宮の敷地内にあったこの講堂は、760年頃に御所から寺に贈呈され、その後、今日の広々とした建造物として改築されました。

唐招提寺の多くの建物と同様に、講堂は国宝であり、建築的に重要な建物です。寺院が置かれている場所が奈良の中心部に位置していた時代、寺院のすぐ北東に位置していた平城宮の名残が記憶されている、現存する唯一の建造物です。

この建物の屋根は、入母屋造りと呼ばれる建築様式で作られています。入母屋造りとは6世紀に中国から日本に伝来した様式で、それ以降、寺院や神社の建築に使用されています。

切妻は通常、建物の母屋を保護し、寄棟屋根は母屋の外側を走る隆起した通路（庇）を覆います。他の多くの建物と同様に、屋根自体は本瓦葺として知られる伝統的な瓦で覆われており、下向きの半円形の瓦が、平ら、またはわずかに上向きの瓦と交互になっています。建物の土台は、浸水や湿気から建物を保護するために高くなっています。今日見られる構造の多くは、鎌倉時代（1185–1333）に遡ると考えられています。

講堂の内部には仏像が安置されています。お堂の本尊である弥勒如来に加え、四天王の二人、持国天と増長天があり国宝に指定されております。論議台もあり、昔ながらの方法で、仏教の教義についての論議が行われます。これは、現在、年に2回行われる公式の行事です。そのうちの1回は、5月に行われますが、仏教と雅楽の演奏もあり、寺院創始者の鑑真が伝えた「陪臚」という曲も演奏されます。